

漫録

フエルニールの古梟

——(瑞西紀行の一節)——

内務書記官 石原雅二郎



トレベスの「ゼネバ湖」を勢働事務局のスイス文庫の中か

借りて来て讀む。その末章に「フエルニールのボルテール」と謂ふがある。その文の餘りの面白さに誘はれて十月の或る日秋晴の日の光を浴びて宿を出る。途々信用狀で銀行から金を出したので、裝飾窓の品物に眼がひかれて立とまつたり、

眺めたり、道草を大分喰つた爲。少しの時間の差で先の電車に乗り損ね十一時二十五分にやつと郵更局前を發車した。電車の系統番號は七である。

市街を暫く走るとすぐ郊外に出る。低い籬越しに青草の上に赤い林檎の果が落ちてゐるのが見えるアリアナは、この前の麗かな日の午後、もう人影も見えぬ船着場の椅子にたつた一人腰かけて、モンブランの雪の輝を美しい雲の間に眺めつ

、すぐ下の青い水の中に泳ぐ小魚の姿を追ふとなく追ひつゝ、みつめて紅茶を嚙つた彼の上の方の村はづれであらう。それから果樹園がつづく、林檎の枝も撓り鈴なりに下つてるのをかすめて電車は走る。緩かな坂、兩側の牧場に邊どつた森のかけに百姓家が隠れてゐる。巻きかへす雲の峰つづきにユラ山々が黄ばむ。仰いでも伏しても秋のノイスは美しい。グラランド、サコネーを過ぎるとき掘立小屋から憲兵が首を出してゐる。そのとき若い男が肩を叩いてバスボートと言云つた。不思議に思つてゼネバの宿に残してあると謂ふとその儘下りて了ふ。電車は又走り出す。カントン一つ變つても何もそんなに喧しくせずとも考へてゐるうち小さい街に

電車が入る。車掌がフェルニーと謂て怪しな手つきをする。

電車から下りて狭い街の人道に立つて、さてどちらに行つたものかと邊を見廻してゐると、すぐ前の並木道の真中に奇妙な瘦せた老人が立つてゐる。埃及のミイラの光る眼、頬の膚は肉と共に落ち凹み、穴が空いたかその窄んだ唇は齒が抜け落ちても一文字に引締る。狭い額が突出し、頭がツルリと禿げたのを隠すか鬘を冠り、體だけいやに細長く襟の長い外套をその裏から毛皮のむくれ出たまゝ、一着に及んでゐる。天鵞絨の黒い帽子を左腋に狭み、右手に杖を突き前屈みになつ

て臺の上に立つてゐる。をや犀のやうな翁さんと見ればそれはボルテールの銅像であつた。フェルニーにはその外に少し下つた四辻。篠懸の葉の茂つた陰にある噴水の後にも長方角の石の面に半身の小さい像が彫りこんである。

二

ボルテールはその永い奮闘の生活を彼方此方に送つて遂に六十四歳の頽齡に及んでこのフェルニーの寒村に隠れ住んだのである。時は一千七百五十八年。その頃のフェルニーは貧乏のどん底に陥つてゐた。傷しい虐使の下に租税の絞り出しにされてゐる。四、五十の農家が牛馬にも等しい生活に煩み、自分の土地に柵さへ造ることが出来なかつた、それは領主の獵の邪間になるから、刈込の穀物を積めばゴルフの障だと壊され、葡萄酒に柵を造らうとすれば鷓鴣の飛ぶ妨けになると叱られる。然し此が當時フランス一般の田園の状況であつたとは謂へ、ボルテールがこゝに其の屋敷を姪のマダム、デニエの名儀で買取つたときは邸も野も荒涼としてゐたと謂ふ。彼の熱心で邸は修理される、その周圍には無暗と樹を植えられた。近くの住み荒された教會を再建して世界中たつた一つの神にのみ捧げられた教會と彼が誇りつゝ、尖塔を眺めて微笑

む頃にはフェルニーの有様も亦一變してゐた。もうその頃には學校が建つ、醫者も出來たし、農家も彼此百軒以上に増えボルテールを村の長老と敬び慕ふフェルニーの村は十年にして面目を一新して了つた。

ボルテールはフェルニーを自分一人の力で斯くも美しい平和の村に作りあげたが、其の姿が街に風の如く出て來ると子供を泣かせ、犬に吠えられるが落であつた。其程に奇抜な風彩の老人は家事を全くデニー媪さんに委せて了つて、小娘のベレエボンに八十三の翁さんの癖に夏の夕などサロンでダンスを教へて暮した。デニー媪さんは虚言つきはその病みつき

であるうへ、いつも喜劇の演つゞけ、をまけに在りもせぬ自分の戀人に懲文許りかいてゐると云ふ四十三の醜婦の上にとだけものである。ベレエボンはボルテールが猫の子でも拾つて來るやうに何處からか連れて來た娘で、伶俐で快活で、ボルテールが一つは脚本を、一つは詩を、一つは手紙に後の二つは寸鐵人を殺すその批評を執筆する五つの机の上の散らかつた原稿の整理も出來るし、怒ればなだめ、當り散すこの癩癖持の大きな子供を母の様にすかすに足る、美貌の持主であつた。その金の鈴を振る如き笑聲は老の唯一の樂であつた。こ

うした不思議のボルテール一家は千七百七十八年に其の主人

のさめぬ眼に依つて一變して了つた。彼の死は八十四歳のときである。デニーは六十九の歳甲斐もなく嫁いてゆく、家屋敷は人手に渡るを餘儀なくして、一度はベレエボン夫婦の手に歸つたが、其さへ又離れていつの間にかボルテールの遺物は風に吹きまぐられるが如くにその居間の支那紙の壁紙さへ無くなつて了つた。

今日其處を訪ふ人はボルテールの植ゑた樹がこんもり茂る間から、唯ありし日の外形のみがホテルかと見まがう昔の儘の三十幾つの部屋をもつ邸を見出す許りである。鐵の門は冷に閉されて、覗くと青草の邊に小さい銅像が落葉の雨に立つてゐる床しい姿が眼に入らう。邸は廻れば高い石の屏が又もとの鐵の門に歸る迄立ちつゞけてゐるであらう。

三

ボルテールの館の門から右に廻つて裏門の車止の石の上に乗り、扉の上に首を出して中をのぞくと廣い芝生か館をめぐる樹の茂と花壇とを包んでゐる。その間から白い壁が透して見えるが、誰一人の影も寫らぬ。又ことごとと壁に沿って歩けば館の裏裏邊に楡の大木を圍んで中庭の廣い廊と納屋と住家とで三方を塞ぐスイスの農家の前に入る。土の上に班に午の

光が葉影を寫して搖ぐ中を鶏がククと啼きつゝ、羽蟲を追ふてゐる。其所から少しゆくとボルテールの植えた林の中に道が入る。その曲り角の籬から熊蜂が一匹飛んで来て外套の肩に止る『ボルテールの悪戯かと刺されぬうちに拂ひのけ一さんに坂を下ると村の往還に出る。何だか水の音がする、ふりかへれば古びた石垣の隙間から噴水が見える。小門はこゝも閉めて私邸と建札迄立つてゐる。迷ひ込む好奇心の旅人を明瞭に門前拂を喰せてゐる田紳の邸である。

其の前から果樹園に入る。水氣の多い草地の爲に疲れたがそのまゝ、草を藉て憩ふ暇もない。立ちとまると何處からとも無く忙しい鈴の音がカランコロンと響いて来る。牛が居るのたなと眼をあけると林檎を袋一ぱいに入れて双方の端を兩方から二人で携けた田舎娘が牧場の中を来る。それも道に上ると何か聲高に話しつゝ、田舎屋の方へ曲つた。自分は一人でこの牧場の林檎の樹陰に草を藉りて日にやや汗ばむ體を横へた。

ユラの山が遠霞む、その裾から平地一面に果樹園と牧場とが續く、その中を貫く街道筋は並木の列が長くその所在を示し、ポプラの天に沖する姿は所有地の區劃を現はす。全く小春日和である。たつた一人でこゝに居る。スイスの野に自

分を見出したときにすぐ目の前に林檎が一つ草叢の中に落ちてゐる。自分はちつと其を凝視してゐた。それを拾つても誰が咎めやう。やをら體を起して之れを手にし、軟く抛けては受けつゝ、ぶらぶらゆく。この邊は徑も無い、唯ゆくに草を分けて歩むうち林檎畠に入る。青草の上には班々と赤い實が落ちてゐる。よく見れば早く落ちたものは腐れて、その上に又新しい果が落ち、草は生へるにまかせ。美しい景色である。落ちた果の一つを拾つて見ると稍々赤味を帯び澤々と光つてゐる。又拾つて見ると圓い感のいかにもいゝ木の實、三つ、四つ、甘美の香がたゞやう、畠の端にはそこら一面に黒く枯れた。葉が散り青草に埋れた中に稍黄ばんだ梨の實が菌かと疑はれる程に散ばつてゐる。それを又拾ふ。稍々固い感觸にぶつぶつと小さい斑點がある。全體は瓢の形をしてゐる。そこを出て林檎の林に又入つてゆけば叢に街道の白色が現れ、並木のかげや、小川の邊に牛の一角が見えて来る。其首につけた鈴の響が高く低く、近くに從つて耳を聳する許りに高くなる。黄金色の木の實はそこら一面草に埋れてゐる。行きなりに百姓が挨拶してゆく、自分も微笑を返して道に出た。

四

この街道は廣い、小川の端の水草をふみにじつて牛は草や食んでゐる。並木の下草地から大きな尻を突出じてゐるものもある。ポプラーの葉の葉を頸に巻きつけたまゝ黒い眼と赤い大きな唇から涎をたらして牛が覗く。その前を過ぎると如何にも異國人と謂しが胸に染みる。

尙ゆくと左側の小高い丘に篠懸の葉が繁つて往來迄かぶさる。その上に高いポプラーの枝が風に搖れて白い葉裏を翻へす。丁度この木蔭に一人の男が寝そべつて小娘に鬚を弄らせつゝ、若い女の膝に頭を凭りかけてゐる。その男は小娘のするがまゝになつて眼だけは鋭く異國人の姿を追ふ。若い女も粗末な着物を目に浴せ手には縞の荒い布を縫つてゐたが、針をとめて夫の凝視あるその怪しい人影を驚く風もなく流眇をなける。その背景になるものは一臺の屋臺車である。煙突さへ着いてゐて今微かに煙がのほり、窓からレースの汚れを見せ後の方の入口から中の棚に列べた道具類、踏臺に近く釜が露れてゐる。少い家を車の上に載せてゆく、此はヨーロッパ中を山から山へ谿から又谿に、平地をゆくとときは牧場の陰に、市が町に立てばその市に、歌ひつゝ、移りゆく自然の兒チゴイネルの一家であつた。フェルニーの町はづれにふさはしい光景をなつかしくふりかへりつゝ、ゆく。

現在のフェルニーは植民地の面影は無く、どこ迄も靜かな大樹の陰を庭の廣場に落し、多くは二階建の、どれも灰色の壁であるから見分け難い迄に似寄つてゐる。崖の小路に草が茂る、壁と壁との間から小供が飛んで来る。入口の前の廣場で二三人の主婦達が立ちながら話してゐるのは、林檎酒の出來の噂か、平和な田舎のフェルニー、噴水の可憐な街道である。そこ迄来ると女と巫山戯てゐた白紐釧、白い邊どりの洋服を着た巡查がつかつかと近づき何か謂ふけれどフランス語をしらぬ自分にはバスボートの一語だけしか解らぬ。可笑しなところに来たと思つたのはボルテールの古い館をゼネバから見に来たのでバスボートは持合せぬと云へば「あゝ、ボルテールボルテール」と獨言を言ひつゝ、クルリと踵を廻して女の方へゆく。狐に魅れた様にして立つてゐた自分も苦笑して歩き出す。フェルニーの午後は靜である。街で遊んでゐた悪戯小僧の群も噴水の邊から消えてゐた。自分はこれから如何しやうかと本通に出て電車に沿ふて引かへしながら考へる。ゼネバに歸る考も浮んだが、ボルテール館の前の並木の美しさを思出して一時十五分の電車を後に見て坂路を登り始めた。

坂の途中に籬に花を植ゑて青ペンキ塗の椅子が轉つてゐる。寂れたホテルがある。その直ぐ下に篠懸の黄い葉に埋れてマリアの像が立つてゐる。黄葉を透す日の光がその頬から肩にかけ黄金色に輝く、白壁を後にして美しい像の姿に心ひかれて庭に入ると尖つた屋根が高く天を指してゐる。フェルニーにぶさはしいマリア寺、こゝに着いたとき連りに森の中から鐘の響が鳴り渡つたのはこの鐘樓からであつたであらう。

そこを出て坂路を登りつくりリデンの老木が梢を交へて黄葉の遽洞を造つてゐる。ホルテール館の前の並木路に出た。風が吹き渡ると落葉が雨のやうに飛び下る。仰けば日に透れた木の葉の鮮な色、ゆきつくして岐路の角にあるベンチに腰かけ遙に眼をあけるとユラの連山がホルテールの昔の家の後の森の上につつと延びてフェルニーの村を遠く圍む。その先が低く地平線に落ち合ふところにはゼネバ湖



（信通州歐事幹本松） 官察警通大のアリピせるな切親

があるのてあらう。それ迄は丘陵起伏し、牧場が續き、森が黒く、日はあかあかとその上に照る。所々に樹を負ふて建つ家の壁を白く、屋根を赤く輝してゐる。いゝ眺である、又並木の徑に眼を移すと、すつかり黄葉の遽洞は散る葉が吹雪の如くに飛ぶ。いくら落ちても落ちても散りつくさぬ老リンデンの大木の影がズウツト見渡すかぎり大地に印してゐる。

いくら居ても際限が無いと思ひ腰をベンチから離して歸路につく。ホルテールの教會を探したがそれらしいものも見當らず、並木の出口の美術館風の家の方に塔の高い一軒の建物をそれときめて思切よく坂を下り、待つてゐる電車に乗つてゼネバに歸る。牛の鈴の響に送られ、果樹園の中を電車は又歸つてゆく。往きにパスポートを調べられたところへ來ると又パスポート調が開始。ふと氣がつけば税關さへある。驛の右左に立つてゐる。ふと氣がつけば税關さへある。驛の右左に立つてゐる。あゝもうフランス領であつたのである。